

熱海土石流災害の令和6年8月8日静岡新聞朝刊に対する本県の見解

令和6年8月13日

令和6年9月11日(追記)

静岡県砂防課

熱海土石流災害に係る発生原因に対する令和6年8月8日静岡新聞朝刊の「分水嶺の開発に関し、県幹部は7月の知事定例記者会見で、県として、盛り土崩落への影響を否定しないとする見解を初めて明言。」との内容の記事がありました。

7月23日の知事定例記者会見での砂防課長の表流水に関する説明は、県が公表している「逢初川土石流の発生原因調査報告書」の検討経緯やその内容についてであり、「新たな見解」や「初めて明言した」ものではありません。

◎ 新聞記事の記載内容に対する県の見解について

日付、記事内容(該当部分)	県の見解
【令和6年8月8日】 (見出し) 水流入の斜面で相次いだ崩落 前所有者 盛り土時認識か	
記事1 ・分水嶺の開発に関し県幹部は7月の知事定例記者会見で、 <u>県として盛り土崩落への影響を否定しないとする見解を初めて明言。</u>	見解1 ・7月23日の知事定例記者会見(参考1)で、砂防課長は、発生原因のメカニズムを検証する委員会において、徳島大学の教授のシミュレーションについても議論しており、「 <u>表流水を否定しているわけではありませんが、大量で集中的に表流水が流れた痕跡が確認できなかったことから、地下水が主原因として報告書を取りまとめた</u> 」と回答し、 <u>新たな見解は示していません。</u>

(参考1)令和6年7月23日知事定例記者会見での質疑要旨

記者 分水嶺の開発の影響で、盛土に水が流れ込んだのではないかとということが、いろいろ指摘されていて、県からも新しい資料が出てきている。先日の新見解では、表流水の影響は否定しないというふうに書かれてるが、この表現が曖昧だったので、県の見解を確認させてもらいたい。
砂防課長 分水嶺を跨いだ開発に伴う表流水の可能性について、発生原因のメカニズムを検証する委員会では、土木学会や地盤工学会、砂防学会から推薦いただいた有識者の意見や助言をいただきながら様々な検証を行って、崩壊の主たる原因は、地下水であるとの結論に至ったところです。 検討の過程では、(表流水の流入を検討した)徳島大学の教授のシミュレーションについても議論しているところです。表流水を否定しているわけではありませんが、被災後の現場調査において、草や木などが流水で倒れたような、大量で集中的に表流水が流れた痕跡が確認できないことから、委員会の中で地下水が主な原因として報告書を取りまとめました。

(参考1-2)

令和6年7月23日知事定例記者会見録より熱海土石流に係る質疑をすべて掲載【追記】

(記者) すいません。静岡新聞です。盛土問題の関係で基本認識をお聞きしたいんですけども、知事は浜松市長時代にも、あの天竜区の緑恵台の盛り土崩落に関して対応されてると思うんですけども、先日、熱海の土石流の災害の関係で、県から新しい見解も発表されたと思うんですが、その盛土の崩落に関しては、今回の新見解では、自然災害ではないというふうなことを言われてると思うんですけども、天竜区の緑恵台の問題も含めてですね、盛土の崩落自体、こういう災害自体が自然災害という認識があるのかないのか、そのところを教えていただければ。
(知事) 自然災害かどうかで一概にですね、一言で言える問題ではございませんので、ケースバイケースで、しっかりそこは検証しながら判断することではないかというふうに思います。
(記者) 緑恵台の場合は、自然災害ではない、いや、自然災害という形で対応していたと思うんですけども、熱海の土石流災害は、自然災害ではないという、そういう見解だということでしょうか。
(知事) ちょっと、ちょっと担当の方から確認させていただきます。
(砂防課長) 砂防課長の杉山と申します。よろしくお願いたします。まず不適切な盛土に関する熱海の土石流災害ということでございます。盛土に関してですね、崩壊のメカニズムについては、県の検証委員会で検証いたしました。地下水が主たる原因であろうということでございます。 自然災害か否かということでございますけども、自然の斜面ですとか、自然の沢地形や谷地形を有する溪流からのですね、発生する土石流に関して、自然災害ということでございます。それを一応砂防指定地、砂防事業として、対象としておるということでございます。 人的にですね、盛土された今回の災害については、自然災害ではないというふうに認識しております。以上でございます。
(記者) 知事も同じ見解という、これは県、県の見解ということでよろしいでしょうか。
(知事) はい、そうです。
(記者) わかりました。 あと、ちょっと今の部分にも関連するんですけども、分水嶺のですね開発の影響で、盛土に水が流れ込んだんじゃないかということがいろいろ指摘されていて、県からも新しい資料というのが出てきているんですけども、先日の新見解では、表流水の影響は否定しないというふうに書かれてるんですが、この表現がちょっと曖昧だったので、そのあたり、県の見解確認させてもらえればと思うんですが。
(知事) はい、すいませんお願いします。
(砂防課長) 砂防課長杉山でございます。今、ございました分水嶺を跨いだですね、開発に伴う表流水の可能性ということで、新聞記事等でも掲載されているところでございます。 まず発生原因のメカニズムを検証する委員会につきましては、土木学会や地盤工学会、砂防学会から推薦いただきました有識者の委員会です、意見や助言をいただきながら様々な検証を行って、崩壊の主たる原因は、地下水であるとの結論に至ったところでございます。検討の過程ではですね、シミュレーション、徳島大学の教授のシミュレーションについても議論をさせていただいておるところでございます。表流水を否定しているわけではございませんが、シミュレーション結果を見た中でのですね、大量、集中的な表流水につきましては、被災後の現場調査におきまして、草や木などが流水で倒れたような痕跡がですね、確認できなかったということでございます。 そういったことで、あの委員会の中ではですね、地下水が主原因だと、このように報告書として取りまとめさせていただいておるところでございます。

<p>以上であります。</p>
<p>(記者) 表流水の影響については否定されないということだったんですが、そうしますと、やはり分水嶺の開発に関しては、やはり再発防止が大事になってくると、これは徳島大の先生もおっしゃってるんですけども、そのあたりが県の検証ですと、再発防止に関して触れられていない部分があるんですが、知事としてそのあたり、分水嶺の開発について、再発防止策、何か検討する必要があるというお考えはありますかでしょうか。</p>
<p>(知事) 触れられてないんですか。ちょっとすみません、回答をお願いします。</p>
<p>(経営管理部総務課長) 経営管理部総務課の課長の清水と申します。再検証の中で、その源頭部の周辺区域の、土地の改変行為について検証していく中で、何て言うんですかね、分水嶺が改変されていたかどうかというところは、確か確認をした資料の中からは、あの確認できるものがなかったもので、検証というのはいないんですけども、その分水嶺の改変についての、その再発防止策というところについてはちょっとうまく言えないんですけども、その流域を開発するときに、その開発の行為についてのですね、許可申請なりなんなりというところが、事業者の方からですね、所管の行政庁の方に申請とかされたりとかすると思われるものですから、その開発の許可申請がある中でですね、分水嶺の開発がされていない計画であるということ、きちんとしてですね、確認をしていくというのが基本的なところなのかなというふうに考えております。</p>
<p>(記者) その部分は砂防法に関する再発防止策のところだと思うんですか。そういう理解でよろしいでしょうか。</p>
<p>(砂防課長) 砂防課長杉山でございます。 今の分水嶺に関わる開発の関係のですね砂防法の関係でございますけども、先ほど申し上げました通り、砂防法はですね、自然災害、自然の斜面、自然の溪流から発生する土砂を対象としております。逆にですね、開発に伴う人工の土砂についてはですね、対象としないということでございます。治水上砂防の前提の中でですね、砂防指定に、6番目の項目として、開発の項目、ハンドブック等にも記載されておりますけども、開発をもってですね、砂防指定地に指定するということにはございません。こちらについては先週ですね、公表させていただきました、県の見解を国と相談しながらあらためて公表いたしましたので、こちらについても御参照いただければと存じております。以上です。</p>
<p>(記者) 最後にごめんなさい知事に1点だけ。</p>
<p>(記者) 知事に聞きたいんですけど、いいですか？</p>
<p>(記者) じゃあ、最後に1点だけ質問させてもらってからでもいいですか、すみません。知事7月3日に追悼式に出席されて、その後源頭部の方は現場見られたんですかね、そこ。</p>
<p>(知事) はい。</p>
<p>(記者) その源頭部見られて、その分水嶺開発も含めてですけども、ちょっと印象を伺いたいんですけども、やはり、分水嶺の開発をしてしまった場合に、やっぱり隣接領域から水が流れてしまうというような、そういう場所だなという、僕は何度か現場行って、そういう印象は受けてるんですけども、知事が現場視察された印象というのを一言伺えますでしょうか。</p>
<p>(知事) 特にそこまで、詳しい感覚は受けておりません。大量の土砂がですね、急な斜面を流れ落ちたという現場について、確認をさせていただきましたけれども、細かな周辺をですね、分析したわけではございませんので、今の御質問にちょっとお答えしにくいところでございます。</p>
<p>(記者) 危険な場所だなという印象はあります。</p>
<p>(知事)</p>

それはあります。
(記者) ありますか、ありがとうございます。

(参考2)令和6年7月26日に公表した新聞記事の記載内容に対する県の見解

日付、記事内容(該当部分)	県の見解
<p>【令和6年7月24日】 (見出し) 表流水流入 県「否定せず」</p>	
<p>記事1</p> <p>・知事会見 幹部が新たな見解 また、会見では分水嶺の開発に伴って隣接流域から盛り土に流入した表流水が崩落に与えた影響について、「影響を否定しない」とする県の新たな見解を県幹部が初めて示した。</p>	<p>見解1</p> <p>・熱海土石流災害の発生原因については、地形や地質調査などの結果をもとに、土木学会や地盤工学会、砂防学会から推薦いただいた有識者による発生原因検証委員会(令和3年9月設置)において、随時、意見や助言をいただきながら、発生メカニズム等を検討しました。</p> <p>・この検討結果をもとに、県が令和4年9月に公表した「逢初川土石流の発生原因調査報告書」においては、地下水が崩落の主要因であるとしていますが、表流水の影響を否定しておらず、今回、崩落の要因について、県として「新たな見解」を示したものではありません。</p>
<p>記事2</p> <p>・県が設置した発生原因調査検証委員会は、土石流の発生1カ月後に撮影された現地写真などに基いて「(分水嶺に)明確な流水痕は視認されなかった」と報告書に記載し、表流水の流入による崩落の影響に触れなかった。</p>	<p>見解2</p> <p>・県が示した「逢初川土石流の発生原因調査報告書」では、隣接流域からの表流水について「崩落地側に流入するという可能性は否定できないが、現地では明瞭な大きな流路や侵食痕跡は確認されない。」(別紙の報告書写真を参照)としており、これまでも県は表流水の流入を否定していません。</p>

(参考3)令和6年7月19日に公表した新聞記事の記載内容に対する県の見解(抜粋)

<p>【令和6年7月4日】 隣接流域雨水 先端へ</p>	
<p>記事10</p> <p>・いずれの箇所も県は土石流発生後の現地調査で「明確な流水痕は視認されなかった」と流入水の盛り土への影響を否定していた。</p>	<p>見解10</p> <p>・記事に掲載された徳島大学中野教授の見解は、令和3年9月から令和4年9月までの間に実施した「土石流発生原因調査検証委員会」でも検討しています。この解析どおりの流水があれば、現地でその痕跡が確認できるはずですが、県の現地踏査で明確な流水痕が視認されなかったことから、表流水が集中して流入した可能性は低いという見解を出しています。(表流水を崩壊の主要因としていないだけであり、影響表流水の流入※を否定してはいません。)</p> <p>※令和6年7月19日の県の見解で記載した「影響」とは、「表流水の流入」を指していることを明示しました</p>